

叙事詩「キュブリア」考

松 平 千 秋

一

アテーナイオス 334Bは、叙事詩「キュブリア」からの引用として、ヘレネーの誕生を敘する十二行の詩句を、ほとんど完全な姿で傳えている。^① 愛欲に驅られたゼウスが髪的美わしい女神ネメシス (Nemesis) を追うと、女神はこれを厭い、魚、獸、鳥など様々に姿を變えてゼウスの追跡を逃れようとする。——斷片はここで途絶えるが、アポロドーロスの「神話」(III, 10, 1) によれば、最後にネメシスが鷺鳥に身を變じたとき、ゼウスは白鳥となつて遂に彼女と契り、ネメシスは卵を産む。この卵から美女ヘレネーが誕生するのである。一見してこの物語は、著名なレーダー (Leda) 傳説の一異傳の様に思われるであらう。その傳説とは、いうまでもなく、ゼウスが白鳥に姿を變えてレーダーに近づき、彼女の産んだ雙生の卵から、ヘレネー、クリュタイムネーストラー、およびディオスクローイ (即ちカストールとポリュデウケースの雙生児) が誕生するという説話である。^② 現にアポロドーロスは、上述の箇所において、先ずこのレーダーの物語を述べ、その異説としてネメシス説話をあげているのであり、さらにネメシスの生んだ卵はレーダーの手によつて孵化され、これから生れたヘレネーはレーダーの娘として養育せられたとしている。この最後の項は、異つた二つの傳承を融和させようとする、

神話における常用の試みと見られるであろうが、いずれにせよ、ヘレネーの系譜に關して、二つの異つた所傳が並存していた事は疑いがないと思われる。

この二つの傳承のいずれがより古く根原的であるかを決定することは、一見容易である如く見えて、實はそうでない。後世レーダー^{II}ヘレネーの系譜が壓倒的に普及した結果、これが正統の傳承であり、他はこれから派生した異傳と考えられ易いけれども、實はそのように簡単に斷定し難いふしがある。文證される限りにおいては、レーダーがゼウスによつてヘレネーを生んだとする傳説は、エウリーピデースの悲劇「ヘレネー」17—21（前四一二年頃上演）にはじめて現われる。ネメシスをヘレネーの母とする説の最初の例證は前述の「キュブリア」である。「キュブリア」の成立した時期は前六世紀末より新しいとは思われないから、文獻的にはネメシス説話の方が、レーダー説話よりも古い譯である。意外に思われるのは、ホメーロスに一度もヘレネーの母の名が擧げられていないことである。ホメーロスではヘレネーの父はゼウスとされて、ほぼ安定しているが、母に關してはイーリアスもオデュッセイアも不思議に沈黙を守つてゐる。ただイーリアス^{II}, 238 に、ヘレネーの言葉として、ディオスクローイを同じ母から生れた兄弟と呼ぶ條りがあり、オデュッセイア^{II}, 298—300 ではレーダーがカストールとポリュデウケースとを生んだとあるので、この二節を組合せれば、ヘレネーの母はレーダーとされねばならない。しかしホメーロスの場合、この様な推論の仕方が頗る危険であることはいうまでもなく、ことにイーリアス^{II}とオデュッセイア^{II}とを同一の面において眺めることは、少くとも今日のホメーロス研究の段階においては妥當でない。かくてイーリアスとオデュッセイアとは、この點に關して、何等積極的な資料を提供しない^④。この沈黙は或は全くの偶然によるのかも知れないが、兩詩におけるヘレネーという人物のもつ重要性を想えば、些か奇異とするに足ろう。ヘーシオドスもヘレネーの母については何も教える所がない。かくして所謂「敘事詩の環 (ἐπεικὸς κύκλος)」の一篇「キュブリア」に至つて、はじめてネメシスの物語が現われ、つづいて殆んど百年おくれエウリーピデースにおいて、

レーダー説話が言及されることになる。

文獻の時代的先後が、傳説自體の發生の順序を決定する根據となりがたいことはいうまでもないが、それとは別にネメシス説話が單に詩的なフィクション、或は正統的傳説からの氣紛れな脱線ではないことを示す事實がある。それは女神としてのネメシスの崇拜が古くからアッティカ及びイオーニアのスムイルナーにあり、ヘレネーとの結びつきもかなり早くから存在したらしいことである。アッティカの東北端、エウボイア海峽に面する小邑ラムヌース (Rhamnus) は、古來ネメシスの崇拜で有名であつた。近代の發掘の結果によれば、パッサニアース (Pausanias) によつて詳細に記述せられているネメシスの神殿は前五世紀中葉のものとされ、この神殿に先立つて存在した舊神殿は六世紀の末頃のものと推定せられている^⑤。その信仰が更にそれよりも古く遡ることは容易に推察される。パッサニアースの記すところによれば、ネメシスの神像の臺座には、ペイディアースの作に成る浮彫が施され、ヘレネーがレーダーに導かれてネメシスの許に連れられてゆく様が寫されていた。この構圖が果して何を意味したかについては議論の餘地があるとしても、ラムヌースの主神としてのネメシスがヘレネーと關聯をもつたことはこれによつて示されている。またカルリマコスがヘレネーを「ラムヌースの女 (Ραμνοῦνός)」と呼んだのも、同じ關係を指すものと考えてよからう^⑥。更にまたアポロドーロスが前述の如く、ネメシス・ヘレネー説話を敍べたのち、つづいてテーセウスによるヘレネーの掠奪に關する傳説を語っているが、これはヘレネーとアッティカとの關係を示すのみならず、その誘拐せられた先がアビドナというラムヌースの西南程遠からぬ場所であることも、ヘレネーとラムヌースとの關聯を暗示する如く思われる。

スムイルナーにおけるネメシス信仰^⑦が、アッティカのそれと關係をもつものかどうかは明でない。初期のイオーニア植民がアッティカからネメシス信仰を移植したことは十分考えられることであるが、例えそうでないとしても、ギリシア本土におけるネメシスの信仰が、アッティカ特有のものであつた事はほゞ疑いないといつてよからう。

思うにヘレネーの二つの系譜のうち、一はアッティカにおいてネメシスと結ばれ、他はスパルタにおいてレーダーと關係づけられたと考えるのが最も妥當ではあるまいか。元來ヘレネーは、他の多くのギリシアの神々の場合と同様、その語源が明かでなく、恐らくその起原は前ギリシアの女神に求められるべきものであろう。^⑥ そのような古い神話的人物が各地においてその地方固有の神またはそれに類した人物と系譜的關係におかれることは、いずれの國の神話においても決して珍しい現象ではない。たゞ何故にスパルタにおいてはレーダーと、アッティカにおいてはネメシスと結ばれたかという問題が當然起るが、これについては今は立入らぬこととする。^⑦

二

かくして敘事詩「キュブリア」の作者はアッティカの傳承に従つて、このネメシス説話を用いたと推定する理由がある。このことは既にヴェルカー (F. G. Welcker) が指摘した所であり、彼は更に、「キュブリア」においてこれより他にもアッティカの色彩の濃厚な幾つかの特徴に言及している。^⑧ このことは「キュブリア」の作者が特にアッティカに深い繋りをもつていた事を暗示するようであるが、彼がこのヘレネー誕生に關するネメシス傳説を採り入れた事には更に深い意味があつたと思われる。

元來敘事詩「キュブリア」は、所謂「敘事詩の環」と呼ばれる一聯の敘事詩の内的一篇であり、イーリアス、オデュッセイアを含んで八篇より成つたといわれるトロヤ敘事詩群中、その劈頭に當り、イーリアスの序篇たる位置にあつた。^⑨ 「敘事詩の環」とホメーロスの二大敘事詩との關係については、古來諸説が爲されたが、總體的に言えば、イーリアス、オデュッセイア以外の作品は、この二詩を前提とし、その前篇、後篇乃至續篇として構想されたと信じて大過ないように思われる。^⑩ 「キュブリア」がトロヤ敘事詩群中の第一篇として、トロヤ戰爭の發端にはじまり、最後にイーリアスの物語

に續くまで、いくつかの挿話を交えつゝ、敘述していたことは、プロクロスの傳える梗概によつて明かであるが、常にイリアスに照應して、意識的に伏線を作りつゝ、敘述の進められたことが、いくつかの點で比較的明瞭に看取される。¹⁹ トロヤ戦争勃發の原因について、プロクロスは單にゼウスがテミスと計つて事を起したと述べているだけで、詳細にわたつていないが、イリアス I, 5 の「ゼウスの構想」(Δὸς ἐκκέετο βουλή) なる句に附されたスコリア²⁰は、「キュブリア」に依據して、次の様に説明している。即ち、ガイア(大地)は人間の過剰とその墮落とに苦しみゼウスに哀願したので、ゼウスはガイアの負擔を軽減し、併せて人間の道德的頹廢を罰する目的で、先ずテーバイの戰を起し、これによつて多くの人間を殺した。つゞいてゼウスは「モーモス(Mōmos)」と計り、その建議に従い、ニンフなるテティスを英雄ペーレウスに嫁がせアキレウスを生ましめ、自身は美女ヘレネを生むことによつて、トロヤ戦争の要因を作り上げたというのである。したがつて「キュブリア」の作者にとつては、ヘレネの誕生そのものが、ゼウスの明確な意志に基くものであり、且人間の墮落を罰する爲の手段という倫理的な意味を荷つていたわけである。こうした聯關において、ネメシスⅡヘレネの系譜は、「キュブリア」の作者にとつてまことに好都合な素材であつたに相違なく、かりにリーダー説話が同時に彼に知られていたとしても、詩人はネメシス説話を選ぶに躊躇しなかつたであらうし、或は更にネメシス説話が「キュブリア」の作者によつて創作されたのではないかという推測すら爲されても、左程驚くには當らないであらう。いうまでもなく「ネメシス」は人間の分を超えた行爲、即ち「ヒュブリス」に加えられる「神々の懲罰」を意味することによつて、古代ギリシアの最も重要な倫理的・概念的の一つとなつてゐる言葉である。ヘレネが人類の懲罰と殺戮を目指す神の手段として誕生する宿命をもつていたとするならば、その母としてネメシスをもつことほど適切なアレゴリーはあるまい。物語の運びにおいて、それは直接にはパリスの背信行爲に對する「報復、復讐」を暗示するとも解されようが、「キュブリア」においてその語の含意する所は更に深く廣いのであり、トロヤ戦争は單にトロヤ方に悲運をもたらしたのみならず、ギリ

シア方にもそれに優るとも劣らぬ惨苦を與えたことによつて、全人類に對する神の懲罰の意味をもつと解されねばならない。

三

さてこゝに注意すべきことは、人間の「ヒュブリス」に對する「神の懲罰」というのは、ネメシスという語の本來の意味では必ずしもない、ということである。いうまでもなく前五世紀においては、ネメシスは殆ど常に「ヒュブリス」との聯關において考えられ、それが語の本義とされた事は、悲劇や散文からの無數の例證によつて明なことである。けれども時代を遡るにつれてその意義は次第に薄れてゆく。ホメーロスにおいては、ネメシスなる語はこれとは極めて異つた意味にしか用いられていないのである。こゝではネメシスは人間同志の間の感情を示すのみで、神とは何の關係もない。それは一般的にいえば、「ある行爲に對する他人の非難、惡感情」を意味する。例えば、オデュッセイアⅡ, 136でテーレマコスが、母ペーネロペイアに再婚を承諾せしめよと迫るアンティノオスに答えている言葉、

némous dé moi és ánthrōpōn / éoietai

は、父の不在中、己の母をその意志に反して邸より追う如き行爲に出るときは「世のひとびとからも難ぜられよう」というのである。神々と關係のないことは *és ánthrōpōn* が明瞭に示している。またイーリアスⅡ, 156—7でトロヤの老人たちが、城壁上に姿を現わしたヘレネーの美貌に今更ながら驚嘆して、

oû némeis Trōas καὶ εὐκνήμεους Ἀχαιοὺς / τοῖσδε ἀμφὶ γυναικὶ τοῖσιν χρόνον ἄλγεα πάσχειν

「かゝる女子の爲とあれば、永の年月、トロイア方と膠着甲斐々々しきアカイア人らが、憂き事を重ねるのも無理からぬこと」というとき、*oû némeis* は「他から非難することでもできぬ、無理のないこと」という意味に外ならない。類似の例を更に重

ねる必要はあるまい。ホメーロスにおけるネメシスの語義は右の二例によつて十分に代表されているといふことができる。ヘーシオドスの「神統記」(Theogonia) 223 にネメシスは、アパテー(詐欺)、ピロテース(愛欲)、ゲーラス(老年)、エリス(闘争)などと共に、ニュククス(夜・闇)の子として挙げられている。「夜・闇」の子等は概して暗い否定的な性格を共有している。ネメシスには更に *νήμα θυγατρὸς Πρωτοῖα* 「人間の禍い」という句まで説明的に添えられている。後世のネメシスの語義に慣れたものには、このネメシスの系譜は異様に思われるに相違ないが、ホメーロスにおけるその語の慣用からすれば、それはさして驚くに當らないであらう。後に社會正義の原理となるネメシスも當時は尙單なる人間の間の「思わく」にすぎないのである。もちろん世の指弾は不正なる行爲に向つて放たれるのが原則である。けれどもその判断は、人間同志の間で行われる限りにおいては、常に必ずしも客觀的に正しいとは限らぬであらう。而して、正當であると否とに拘わらず、世の非難はこれを受ける者にとつて苦痛であることに變りはないのである。しかし「神統記」と同じくヘーシオドスの作とされる「仕事と日」(Erga kai Hēmerai)においては、ネメシスが明らかに、より倫理化され淨化された形姿で現われる。それは名高い五時代の物語中、最後の「鐵の時代」を敍す條りである。人心が荒廢し、道義が地を掃うに至つたとき「アイドース (Αἰδώς) とネメシスとは、美わしい姿を白衣に蔽い、人間の世を見捨てて、オリュンボスへと去るであらう」と詩人は豫言する。ここでネメシスはアイドースと共に明らかに擬人化されている。ヴィラモーヴィツ (Wilamowitz v. Moellendorf) はこの章句に註して、アイドースは、何を爲すべきかを教えるもの、ネメシスは、何を爲すべからざるかを示すものと定義した。^⑧ マレー (G. Murray) の説明は更に懇切で周到である。^⑨ — アイドースは自己の行爲に關して感ずるもの、ネメシスは他人の行爲に關して感ずる所である。破廉恥な行爲をさし控えるのは、自己の良心の聲に聞くとともに、他人の思わくを怖れる感情に出ている。アイドースとネメシスとは、かくて人間の道德的行爲を規制する内と外との原理となる。われわれはしかし時には他人に全く知られずして、行爲をすることができ。果してしか

らばその際にはアイドースのみが働き、ネメシスは機能を失うであろうか。しかし古代のギリシア人にとつては、ほかに人間の居らぬ所にも、眼に見えぬ無数の有名無名の精霊が充ち満ちていた筈である。人間の眼は忍びえても、この遍在する精霊はわれわれのいかなる行爲をも見逃さぬであろう。そしてその報復は人間以上に正確で嚴格でさえあるであろう。

——この様に要約されるマレーの解釋は、ネメシスの概念の倫理化の経路をまことに適切に説明している。しかし「仕事と日」におけるネメシスの倫理化は未だ緒にいたばかりである。ネメシスとアイドースとが人間界を去つた後の世は、道德的無秩序を意味せねばならない。神のネメシスは正にここにこそ下されねばならぬのである。けれどもまた翻つて思えば、ホメーロスの餘りにも人間的弱點にみちたゼウスを道德の最高原理にまで高めたのは、ほかならぬヘーシオドスであつた。人間の非道な行爲に懲罰を下すネメシスの原理が神々、就中ゼウスの手にゆだねられるのは、もはや一步の前進で足りると言つて差支えないのではあるまいか。

四

ヘーシオドスがラムヌース或はスミルナーにおけるネメシス崇拜を知つていたかどうかという問題は餘り重要でないと思われる。ヘーシオドスにおけるネメシスの概念の發展は、彼の純粹な思索の成果と見做して毫も差支えないからである。むしろ、それよりもラムヌースの主神の本體が如何なるものであつたかという問題の方が、「キュブリア」のネメシス説話にはより切實な關聯をもつてであろう。私はネメシスが本來「懲罰の女神」(die strafende Göttin)であつたとするヘルター(H. Herter)の説には疑問を懷くものである。⁽⁸⁾ネメシスなる語が νέμω「配分する」に由來するとすれば、ネメシスにおいてモイラ(Moirai)やラケシス(Lakhsis)に相似た機能を認めることも可能であろうし、また一種の地母神と考へられぬこともない。またバウサニアースの記述によれば、ラムヌース神殿に奉置されていたペイディアース作のネメシ

ス神像は、その冠に鹿の模様が描かれ、左手に林檎の枝、右手にエチオピア人の姿を寫した盃をもつていたという⁽⁹⁾。鹿はアルテミスの、林檎の枝はアプロディーテーに特有の附屬品である所から、この二女神との親近性を指摘した學者もあつた⁽¹⁰⁾。これらはもちろん臆測の域を出ない議論である。けれどもラムヌースにおけるネメシス崇拜が前六世紀乃至はそれ以上にも古く遡りうる可能性がある所よりすれば、その本體が原始的な性格——例えば地母神又は豊穰の女神の如き——をもつたものであつた事は當然考慮されてよいのではあるまいか。かりにネメシスがアプロディーテーに通ずる性格をもつていたとするならば、ヘレネーとの結びつきは、最もよく説明されよう。ヘレネー自體が恐らく、同じ性格の古い女神であつたのであり、レーダーとの關聯も亦同様に説明できるからである⁽¹¹⁾。更に進んで考えれば、女神ネメシスも亦、或はその名とともに、前ギリシア的神格であつたかも知れぬのである。そして後に至つて普通名詞としてのギリシア語形と同化し、その影響によつて、その性格をも徐々に變化させて行つたとも考えられる。はじめに言及したアテーナイオスの引用句中、5—6行にかけて、

ἐρείπετο γὰρ φρένας αἰδοῦ / καὶ νεμέσσει

の句を見出すのは、その文の主語が外ならぬネメシスであることを思えば、奇異な感を禁じ得ない。句の意味は「恥らいと氣がねのために」という程のものであろうが、「ネメシスがネメシス故に云々」という表現は、一種の駄洒落としてでなければ、受取りがたい用語法といわねばならない。ヘーシオドスの前掲の例にも見られる如く、ネメシスとアイドースとの繋りが、後世のヒュブリスとの關係の如く、一種定型化した結果、詩人が半ば機械的に用いたのではないかという事も考慮されねばならないが、それにしても、若し詩人と聽衆とを含む當時の人々の心の中に、女神の名とこの普通名詞の語義との間に生々しい關聯が存在していたとすれば、この様な表現は頗る適切を缺くものとして受取られたに相違ない。思うにこの場合、末流詩人の未熟な表現力を咎めるよりも、神格としてのネメシスが——少くとも當時の人々の意識には

——普通名詞のネメシスとは異質的なものとして感ぜられていた、と想定する方が合理的ではなからうか。その起原が同一であるか否かはしばらく措き、普通名詞ネメシスは信仰の對象としての女神ネメシスとは、一應別箇の語として意識され、獨立に倫理的概念として發展したのであらう。「キュブリア」において、ネメシス説話が一つの重要な契機となつてゐるのは、ヘーシオドスによつて踏み出されたネメシスという語の、倫理化の途上において、アッティカ固有の傳承を把えた作者の獨創に基くものであつたと思われる。したがつて當時の一般的な語感においては、女神ネメシスについて普通名詞のネメシスがその慣用的語義に用いられても、さほど異常な表現として響かなかつたのであらう。

五

「キュブリア」に及ぼしたヘーシオドスの影響は他の點についても認められる。イーリアスのスコリアに述べられた「キュブリア」の梗概のうちに、ゼウスの忠告者として「モーモス」の名が見えることは前述の通りであるが、「神統記」214は「モーモス」を「夜」の子としており、従つて彼はネメシスと同胞である。「モーモス」は普通名詞として「非難、難癖」の意であるから、人格化されると、ほぼわれわれのいう「天邪鬼」に相當するものであらう。事實「モーモス」は、ゼウスがはじめ人間を雷撃によつて殲滅せんと企てたのに難癖をつけて、トロヤ戦争を起して同様の目的を達する様に建議したことになつてゐる。ここにはネメシス・モティーフにおける如き倫理的なアレゴリーはなく、むしろ民話的な色彩が濃厚であるが、いずれにせよ、ネメシス・モーモスのとり合せは全くの偶然ではないのであらう。「キュブリア」が「神統記」に影響されていることは決して偶然ではないのであつて、もともと「敘事詩の環」は天地創造にはじまり、英雄時代の終末にいたるまでの、いわば敘事詩形式による世界史ともいふべき性質のものであつたことが、プロクロスによつて傳えられてゐる。^③ヘーシオドスの「神統記」は恐らく前八世紀には成立し、爾來、宇宙生成、神々の系譜に關する最も權威

ある典據となつて、ギリシア世界に普及していたと信ぜられるので、「キュブリア」も亦種々の點で「神統記」に依據したであらうことは想像に難くない。

ヘーシオドス、或は更に廣い意味でポイオーティア系の敘事詩と「キュブリア」との連關は又別の點でも認めることができる。ペイジ (D. I. Page) は最近著「ホメーロスのオデュッセイア」において、オデュッセイア第十一卷、所謂「ネキュイア (魂迎え)」235 にはじまる神話上著名な女性達を列舉した條り (Catalogue of Heroines; der Heroinecatalog) が、ヘーシオドスの「名婦傳 (Ehoiae)」の模倣乃至借用であることを極めて説得的に述べている。⁽²⁾ このヒロイン達の表に最初に現われる六人の女性、悉くポイオーティア系の人物であることが注目される。即ちテュロー (Tyro)、アンティオペー (Antiope)、アルクメーネー (Alcmene)、エピカステー (Epikaste)、クロリス (Koris)、イーピメデア (Iphimedeia) であり、殘存する「名婦傳」の斷片の中からも、テュロー (fr. 7, 18, 130)、アンティオペー (fr. 132—3)、クロリス (fr. 14)、イーピメデア (fr. 9—10) をあげることができる。さらにこの關係を裏附けるものとして、近年發見せられたバビルス所載の「名婦傳」の斷片の幾つかがあるが、中でもテプトゥーニス、バビルス (Pap. Tebtunis) 271 は最も重要である。⁽³⁾ このバビルスの詩句の第二行及び第三行は、「ネキュイア」249—250 と全く同一である。バビルスは不完全であるけれども、両者が同一の物語を扱っていることは明瞭である。即ち共通な二行の句は、ポセイドーンがテュローと契るとき彼女に語る言葉であり、かくして「ネキュイア」のこの部分とヘーシオドスとは直接的な模倣乃至借用の關係に立つていることが推定される、系譜的な列舉、所謂カタログスと呼ばれる詩の體は、古來ヘーシオドスを宗とするポイオーティア派の敘事詩の最も顯著な特徴とされた。従つてペイジは、この借用關係の方向が、ポイオーティア派から「ネキュイア」へ流れたと斷ずることに躊躇しない。その上「ネキュイア」の中に在つて、このヒロイン達の列舉はその前後と何の有機的聯關をもたぬことが指摘される。かくてこの部分は後世の挿入であらうとペイジは結論する。ところでここに興味

あることは、この同じ「ネキユイア」のヒロイン達のカタログスが、「キュブリア」にも縁由をひいているらしいことである。プロクロスの梗概によれば、「キュブリア」はヘレネーの掠奪についてディオスクロイのことを敘した後、ヘレネーの逃亡を知ったメネラーオスが、ピュロスなるネストールを訪れて善後策を講ずる。そのときネストールは例の饒舌で、話の本筋から離れて (*ἐν παραβόαι*) やまやまの昔語りをする。この物語に現れる女性のうちに——その名は梗概には一一あげていないが——アンティオペー、エビカステー、アルクメーネー、メガラー等のあつたことは疑う餘地がない。またテュローとクローリスとは、外ならぬ語り手であるネストールの祖先に當る女性である。ヴィラモーヴィツは、先にペイジが挙げたと同じ理由、即ち「ネキユイア」におけるヒロインのカタログスの存在理由が薄弱である所から「ネキユイア」が「キュブリア」から借用したと信じたのである。

かくてこの二つの推論より得られるヘーシオドスの「名婦傳」と「オデュッセイア」及び「キュブリア」三者間の聯關は頗る暗示的である。もつともヘーシオドスの priority は動し難いとしてもオデュッセイア（より正確には「ネキユイア」というべきであろうが）と「キュブリア」との先後の順序は必ずしもヴィラモーヴィツに従う必要はないであろう。ヴィラモーヴィツには前掲のパピルスはまだ知られていなかったものであるから、新資料の發見によつて、われわれはオデュッセイアも「キュブリア」も共に「ヘーシオドス」を模したものと考えの方が一層合理的であろう。

六

以上ネメシスⅡヘレネー傳説を中心とする幾つかの考察から、われわれが敘事詩「キュブリア」について或程度明に示したことは次のようなものである。——「キュブリア」は明にイーリアスの序篇として構想され製作されたこと、従つてそれはイーリアスの存在を前提とすること。思想・素材・文體等におけるヘーシオドスの影響が相當強く窺われること。

ことにその素材において、アッティカ的色彩が濃厚なこと、等である。しかし實はこれらの歸結はどれも決して意外なものではなかつたのである。ギリシア敘事詩の傳統が遠くミューケーナイ時代に遡ることは疑いない。前十二世紀ミューケーナイ文化の没落と共に、所謂古代の中世期と呼ばれる暗黒時代に入るが、敘事詩の傳統は、この間も絶えることはなかつた。單に絶えることがなかつたばかりではなく、敘事詩の完成の決定的な段階は恐らくこの時期の間に到達されたものに相違ない。思うにこの困難な期間中、専門的な吟誦詩人たちは、一種のギルドを形成して、比較的に恵まれた環境を選んで各地（主としてはイオーニアであろうが）に散在し、その傳統を養い育てたのであろう。そのような敘事詩のいくつかの中心が、各々孤立に近い状態で數百年を経過したとすれば、本來同一の敘事詩的傳統に出たものも、長い年月の間には自ら獨自の詩風を形成してゆき、遂には素材のみならず言語・表現乃至作風に至るまで相互に著しく異つた作品を生むに至るであらう。ボイオーティア派と呼ばれるギリシア本土獨特の敘事詩體も、その特殊な環境と、ヘーシオドスと呼ばれた特異な天才とはぐくまれて發達した、その様な敘事詩の中心の一つであつたのであろう。イーリアスとオデュッセイアが相互に全く獨立に、二個の異なる敘事詩的傳統から生れたとする、最近の新説の如きも、一見奇矯に見えるが、實は決してあり得ないことではなかつたと思われる。八世紀中葉にはじまる新しいヘラス世界の躍動は、これらの孤立した敘事詩の傳統間の活潑な交流を促し、同時に敘事詩は再び全ヘラス世界へ普及しその共有財となるであらう。われわれはしかしおそくとも七世紀の中葉頃までには、イーリアス、オデュッセイアの二大敘事詩及びヘーシオドスの名の下に傳えられた代表的な作品は、少くともその主要な部分においては、既に成立していたと想定することができる。

さてこの様に再び新生ヘラス世界に擴がつたギリシア敘事詩は、やがてまた集約される方向に進むごとく思われる。そしてその集約の最終的な段階は六世紀後半のアッティカにおいて達せられる。世にいう「ペイシストラトスの結集」がそれである。私には「キュブリア」はじめ「敘事詩の環」に屬する大部分の詩の成立が、この結集と無縁のものとは思われ

ない。それは結集がホメーロスの二大敘事詩以外についても行われて、「敘事詩の環」がこのときに編集されたと主張するわけではない。第一、詩の成立ということは、その結集と同一ではないのである。けれどもアテーナイの僭主のホメーロス編纂という傳承によつて暗示せられる如く、アテーナイが六世紀後半に示した敘事詩に對する異常な熱意と關心とは、恐らく當時のヘラスの他の地方のそれを遙かに凌駕していたものに相違なく、その事は殆ど必然的に他國からの敘事詩人たちがアッティカに牽引する結果ともなつたであらう。恰も、七世紀のスパルタやサモスの僭主ポリュクラテースの許に多くの抒情詩人が集つた如く。プロクロスの記述によれば、「キュブリア」はキュプロスの人スタシーノスの作であり、「小イーリアス」はミューティレーネー人のレスケース、「アイティオピス」はミレートの人アルクタイーノスの作などであり、作者の出身地はギリシアの各地に分散している。これらの詩人に關する傳承が何等の信憑すべき根據をもたぬことは、既にヴィラモーヴィッツの精緻な研究によつて、殆ど決定的に證明せられたといつてよいであらう。^③しかし、たとえば「キュブリア」の作者が傳承の如くキュプロスの人スタシーノスであつたとしても、彼がアッティカに在つて、アッティカ固有の素材を驅使して「キュブリア」を創作したと信ずることを妨げるものは何もないのである。一般に古代ギリシアにあつては、同一の文學的ジャンルに關する限り、詩人の出身地が餘り重要な因子とは見做されないからである。^④

「キュブリア」は恐らく敘事詩としてホメーロスの二大詩の藝術的完成の域に達せず、それ故にこそ、早く散佚する運命に遭つたのであらう。「敘事詩の環」の他の作品も概ね「キュブリア」と相似た經路を辿つて、アレクサンドリア時代を境として殆ど消失したものと考えられる。それらはイーリアス・オデュッセイアという二大樹の根元に育つたひこばえの如きものかも知れない。それらの詩の最大の缺陷は、恐らくアリストテレースの指摘した如く、その構成にあつたのであらう。^⑤構成の弛緩は必然的に詩のパトスの低下をもたらし、敘事詩は次第に説話の興味と多様性によつて聽衆の關心をつなごうとする傾向に陷る。しかしすでに新しいパトスを盛るべき悲劇はアッティカに胎動しはじめ、他方ロゴグラポイ

と呼ばれる説話作家の一群は、散文という新しい武器をもつて、やがて敘事詩人の最後の據點をも陥れるであろう。かくて敘事詩はその課せられた任務を果した後、次の新しいジャンルに引繼ぐのである。

その内包するさまじまの缺陷にも拘らず、敘事詩時代末期に、主としてアッティカに成立したこれら敘事詩は、疑いもなく古代ギリシア敘事詩の傳統の最後の後裔であり、言語はもとより、素材においても作風においても古代の傳統に負う所は頗る多いのである。ただ時代の差は、時に比較的新しい因子を古い傳承に加え、古い素材が新しい思想によつて變形修飾されることを餘儀なくさせたと思われる。

ホメーロス研究は「分析派」と「單一派」との永い期間にわたる對立ののち、近年この二つの立場を止揚する意味で新しい進路を開拓しはじめた。シャーデヴァルト (W. Schadewaldt) の用語を借りれば、それは「モルフオローギッシュ」な方法と呼ぶことができる^(註)。その意味においてこれらのひこばえの形態論的研究も、二大樹の成長の過程を明にする上の一つの手懸りを與えるものと期待される。

註

(1) Athenaeus, 334 B (Allen, *Homeri Opera* V, p. 120. 後に再び言及され

る) *ἡ δὲ τὴν κατὰ τὴν ἑκείνου*

τοὺς δὲ μετὰ τριτάτην Ἐλένην τέκε θαῦμα βροτοῖσι ……

τὴν ποτε καλλίκομος Νέμεος ψιλότητι μετῆστα

Ζηνὶ θεῶν βασιλῆϊ τέκε κρηταρχῆς ἢ τ' ἀνδρῆς.

φεύγε τάα, οὐδ' ἔβλεπεν μυχθήμεναι ἐν ψιλότητι

πατρὶ διέ Κρονίων ἐρείφατο τὰρ φένας αἰοοί

καὶ νέμεος κατὰ τῆν δὲ καὶ ἀρπύγετον μέλαιν ὕδωρ

φεύγε, Ζεὺς δ' εὐίσκε λαβεῖν δ' ἐκιδάετο θυμῷ.

ἀλλοτε μὲν κατὰ κύμα πολυφλοίσβοιο θαλάσσης

ἔχθρ' εἰδομένη πόροντο πλοῦν ἐσπεύονεν,

ἀλλοτε αὖ ἐκείνου ποταμοῦ καὶ πείφατα ταῖς,

ἀλλοτ' αὖ ἤπειρον πολυβόλῃακ' ἵκνυντο δ' αἰεὶ

θρηΐ, ὅς ἤπειρος αἰνὰ τρέφει, ὄρη φύροι νῦν.

(2) レーダー説話の方も、細部にわたれば新舊多様の異傳がある。しかし

ここでは直接に關聯がないと思われるので述べない。

(3) 例へば *Ἐλένη διὸς ἐκτεταυῖα* (Ilias. III, 199, 418), *Ἐλένη κοῖον*

διὸς αἰγύροιο (Ilias. III, 426).

(4) II. III, 156. οὐ νέμεος Τρωάς …… (この句については後出) の句に

ネメシス・ヘレネー系譜への暗示を讀みとらうとすることは、極めて誘惑的ではあるが、無理であらう。os *dejects* はホメーロスでは一種の成句であつて (Il. XIV, 80; Od. I, 350; Iliad, XX, 330 等)、そのような作爲を挿む餘地はないからである。

(5) H. Herter, *PVRE XVI*, 2346—7, s. v. Nemesis

(6) Hymn, III, 282.

(7) スミエルナーのネメシス信仰に關しては Pausanias, VII, 5, 3; IX, 35, 6. に詳しい。この地のネメシスは二體であつたことがパウサニアースによつて記されている。Hesiodos, *Erga*, II—12. の「二つのエリス」を想わせて興味深いが、その眞義については未だ定説とすべきものはない。

cf. Herter, loc. cit., 2353; W. M. Ramsay, *Asiatic Elements in Greek Civilization*, 1927, p. 54 sqq.

(8) ヘレネーの名が印歐語では解き難い所から、一般にその前ギリシア的起原が信ぜられている。H. Grégoire によつて試みられた語原解釋は、興味を惹くけれども、にわかに賛同し難いであらう(彼によれば *Felēn* が音韻の異化作用によつて *Felēn* となり、*Elēn* の語形が得られたという)。そしてラテン語の *Venus, venenum* と同根であると云ふ。

Euripide, *Tome V* (Bude) p. 25, note 1.)

衆知の如くニルソンは、ヘレネーを、アテーナーやアリアドネーらとともにクレータ起原の女神と考えた。ヘレネーにおいても樹木崇拜、鳥の姿の顯現など、クレータ宗教の特質が認められるという。特に鳥の姿をして現われるという點は、ヘレネーの卵生を説明するのに好都合である。M. P. Nilsson, *The Minoan-Mycenaean Religion and its Survival in Greek Religion*, 2nd ed., Uppsala, 1950, pp. 528 sqq. 現在進行中のミ

ケーナイ文字の解讀は、既に幾つかのギリシアの神の名を粘土板の上に見出したが、少くとも現在迄のところでは、ヘレネー及びこれに關聯のある名は發見されていない。しかし今後も現れぬとは何人も斷言できぬであらう。

(9) K. Kerényi, *Die Geburt der Helena*, Zürich, 1945 S. 2—28. はヘレネーに根原的女性の神話的象徵を認め、それに内在する美と罪の意識からヘレネーとネメシス、レーダー(これはリュキア語の *Ida* 「女」と同根であるとするブレラーの説に従う)及びアプロディーテーとの必然的な連關を説く。犀利な洞察に富む好論文であるが、同氏の精神分析學的傾向の強い立場には、そのまま賛同し難いものがある。

(10) F. G. Welcker, *Der epische Cyclus oder die homerischen Dichter* (Rheinisches Museum Supplementband 1), 1835, S. 302 以下に擧げられる「キューブリア」のアッティカ的特徴とは、ネメシス説話のほか、イービゲネイアがアレウスの許嫁として犠牲に供される物語、エウボイア人なるバラメーデースが特に重要視されている點、キューブロス島は古くアッティカのサラミース及びアテーナイから植民されたこと (Herodotos, VII, 90) 等である。

(11) 八篇とは「キューブリア」「イーリアス」「アイティオピス」「イーリオシ落城」「歸國譚」「オデュッセイア」「テレーゴニア」である。その梗概は、ポージェイオスとイーリアスの寫本によつて傳えられたプロクロスの「エブリオターケー」の一部によつて傳わつてゐる。プロクロスの原典及び各詩篇の殘存した斷章は、すべて T. W. Allen, *Homeric Opera V.* に收録されてゐる。

(12) 「敘事詩の環」に關する最も精密な研究は、前掲のヴェルカーの書物

である。しかし Wilamowitz v. Moellendorf, *Homeriche Untersuchungen*, Berlin, 1884, (特に S. 338 以下) はヴェルカーの説を大幅に修正し、プロクロスの信憑性の限界を明かにした。G. Murray, *The Rise of Greek Epic*, 4th ed., pp. 330 sqq. はヴェルカー・ガイッツに從つてゐる。

(13) 例へば、ディオスクーロイの死 (實はカストールのみが死ぬのであるが、ポリュデウケースの歎願によつて、ゼウスは兩人に一日交替に生を興えることになる) の物語は、イーリアス III, 236 以下でヘレネーがギリシア軍中に兄弟のディオスクーロイの姿が見えぬことを不審に思う條りに對する意識的伏線であるうし、又「キューブリア」の終りに當つてゼウスがトロヤ方の自據を軽減する爲にアキレウスを戰場から遠ざける計略をめぐらす如く語られたものらしいが、これなどは作爲が過ぎて、イーリアスの眞意とむしろ合致しないように思われる。

(14) Schell. A. Vind. 61, nimm. in A. 5. (Allen, op. cit. pp. 117—8) などこのうち「キューブリア」からの詩句として次の七行が擧げられている。
 ἦν ὅτε μυχία φύλα κατὰ γόνα λαφύμεν' ἀνδρῶν
 βαρυτέρονος πλάτος αἴης.
 Ζεὺς δὲ ἰδὼν ἐλάνηε καὶ ἐν πεκυνάῃς παραΐδεναι
 εὐθερο κορυφίαι ἀνδρῶνων παμβόροα γάται,
 ἐντίκτας πολέμου μετάλην ἔσαν Ἰλίουοιο,

ὄφρα κενώσεται θαυάτου βάρους· οἱ δ' ἐνὶ Τροίῃ
 ἦρως κτείνοντο· διὸς δ' ἑτελέετο βουλῇ.

(15) II. XIII, 121—2 ἀλλ' ἐν φρεσὶ θέρδε ἑκάστος / αἰδῶ καὶ νέμεσεν ἥρῃ
 イドーンがトロヤ方を激勵する言葉の中に現れるこの句が、ヘーシオドスの念頭にあつたかも知れない。ボセイドーンは神であるが、こゝにア

敘事詩「キューブリア」考 (松平)

イドーンとネメシスを語るとき、その調子は人間同志の間の會話と異ならない。「恥を知つて戰場で見苦しい振舞いをする勿れ」という意味以上に出ない。

(16) Wilamowitz v. Moellendorf, *Hesiodos Erga*, Berlin, 1928, S. 63—4.
 (17) G. Murray, *The Rise of Greek Epic*, 4th ed., Oxford, 1934, pp. 82 sqq.

(18) Loc. cit. 2341.
 (19) 普通にはその様に解かれてゐる。cf. F. Boisacq, *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, 3^e éd. s. v. *Némeceis*; Liddell-Scott-Jones. s. v. Pausanias, I, 33.

(20) H. Herter, loc. cit. 2350; K. Kerényi, op. cit. S. 15—6.
 (21) 註(8)(9)参照
 (22) Allen, op. cit. pp. 96—7.

(23) D. I. Page, *The Homeric Odyssey*, Oxford, 1955, p. 36 sqq.
 (24) 實はイーロメデイアの前にレーデー (= レーダー) が介在する。この章句については上(二頁)に述べた。レーダーはアイトリアの王テステイオスの女とされている。従つてボイオーティアとは直接關係は認められない。

(25) Pap. Tebtunis. 271.
 [Πο]σειδάωνα [

τέλειος δ' ἀγλαῖ τέκ]να, ἔπει οὐκ ἀποφῶ[λοι εὐναί
 ἀναύτων· εὐ δὲ τ]οὺς κομέειν ἀττα[λῆμεναί τε.

]· οὐ ἀγλαῖ τέκνα τ[
]· τα νέμεσταιό τε [

ὡς εἰπὼν ὁ μὲν αὖτις] ἀγα[?]τοῖσι ἐμ[?]νεο πούτοις

]π ἔβη ἀκόπως [

]...ον[

(2) Allen, op. cit. p. 103.

Νέστορ δὲ ἐν παραβάσει διηγεῖται ἀπὸ ὧ: Ἐννεὺς

φείδας τὴν Ἰούκω θυγατέρα ἐξεποσθίθη, καὶ τὰ περὶ Οἰ-

δίκου καὶ τὴν Ἡρακλῆους παιδίαν καὶ τὰ περὶ Θυόέα καὶ

ἸΑκίδου.

(3) Homerische Untersuchungen, S. 149.

(4) 「キュブリア」における言語上の Atticism について明確な結論を出すには、現存の断片の量は不十分である。但しその徴候は認められる。

cf. J. Wackernagel, Sprachliche Untersuchungen zu Homer, Göttingen, 1918, S. 182.

(5) 十二世紀、ドーリス族の侵入によつてミケーナイ文化が甚しく破壊された事は事實であるが、その破壊は従来考えられた程徹底的でなかつたことが、最近の考古學的研究によつて明にされた。大破壊の後も同型の文化が細々ながらギリシア各地に存続したのである (A. J. B. Wace, The History of Greece in the third and second millenniums B. C. Historia, Bd II (1933), S. 74—94. 特じ S. 93 以下)。更に、ミケーナイ時代と相似の政治、社會形態が暗黒時代においても繼續していた事は、例えば、スボス島において見られる。cf. D. I. Page, op. cit. p. 145 sqq.

(6) D. I. Page, op. cit. p. 149 sqq.

(7) 近代にいたつて一時ほとんど全く無視せられるに至つたこの古い傳承

が、今日のホメーロス研究の段階では、むしろ必須の要請と認められることになつたのは皮肉である。アメリカの高名な古典考古學者、カーペンター (Rhys Carpenter) が「かりにその様な傳承がなかつたとしても、われわれ自身、諸事實を説明するために必要な假定として、それを考へ出したに相違ない」といつているのは、この事情をよく傳えている (Page, op. cit. p. 144 に引用)。

(8) 註(2)参照。

(9) 疑問として残るのは、「キュブリア」の名稱である。作者スタシノスの出身地にちなんで斯く名附けられたとする傳承は、私には信じ難い。數多く知られた敘事詩の名稱は、悉くその内容に關聯して命名されている。作者の出身地によつて名附けられた作品は、恐らく他に例がないであらう。したがつて、今日われわれに知られぬ何等かのつながり(勿論内容上の)によつて、この詩がキュブロス島と結ばれていたとても想像するほかはないと思われる。アプロディーテー(キュブリスと呼ばれ、キュブロス島がその主要な信仰の中心であつたので)との聯關も、今日われわれが知りうる限りの「キュブリア」の内容からは、容易には認め難いであらう。

(10) Aristoteles, Poetica, XXIII, 4, 1459 b.

(11) W. Schadewaldt, Homer und die homerische Frage, Berlin, 1938, Sonderdruck aus "die Antike" Bd XIV 1938, S. 21. (ders., Von Homers Welt und Werk, 2. vermehrte Aufl. Stuttgart, 1951 2. 版)。